

野  
槌  
  
上



5  
1876  
1

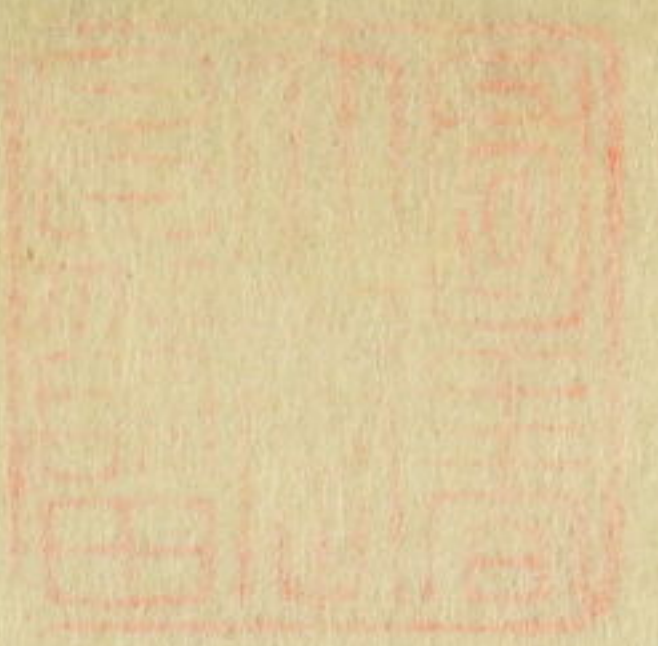




玉馬は君の法園に花ひきこもて根ふして陽を  
 あゆむよりこの庵の心庵よりこもるる  
 とまゝの極ろく結りし子の心もこもるる  
 こもるる心もこもるる心もこもるる  
 培ひつゝ又も花ひきこもて根ふして陽を  
 こもるる心もこもるる心もこもるる  
 秋のせきこもるる心もこもるる  
 小葉の花のみこもるる心もこもるる  
 こもるる心もこもるる心もこもるる



のまゝにうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ



あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ

あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ  
あつちのうまひもまゝにのりしりふりうひひかしてよ

有る庵述

安永戌戌林七村

ゆき夜はる枕上より萩の風  
此下崩れしも此窓を透る月  
一尺又たわたりぬ鮎うられ溢る  
林の馬士のたれりと國豊うらり  
たれりと吸ふ内そ雨散の止むを  
裡の菊の障子此のふゆ冬うれ  
夜明のし亀の甲井戸の干間  
春地のめしの下女の憎もよまり  
強飯と思ひし重れ牡丹餅

存義  
華裡雨  
全  
存義  
華裡雨  
全  
存義  
華裡雨  
全

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

吹をもらしぬ佛檀の蟻

華裡雨

番匠の一言はふらふらついで

全

わらわら跡の僻のつく精樹

存義

野分してあしぬ所小下駄足駄

全

枕昔古角リれ耻と月影

華裡雨

秋の夜臥難波の旅小戀瘦て

存義

懐中鏡得ては<sup>ス</sup>久<sup>ス</sup>なり

華裡雨

坂下へこころの<sup>ス</sup>花の<sup>ス</sup>雪

存義

杉菜えりり小見ゆ<sup>ス</sup>芝

全

卯塔

卯塔よ妻乞ふ稚の顔出して

華裡雨

傘はいて来る御隠居の晴

全

女郎屋を鬼の城ともたぐも

存義

こころと伊達の松と塔む

全

鳴の毛を氷の上へ蒔ちり

其柳

公事小下り<sup>ス</sup>の逗留

華裡雨

目薬下<sup>ス</sup>中ハ座頭あり

全

翌朝雨を<sup>ス</sup>ぬ朝虹

存義

かり船須戸とありしと隣合

南飛

軒とまろくふ風の身似む  
殿首者殿より上容おしてさの月  
紙燭のさしたの落し  
ひりくといく代經ぬらん 湊筒 蛤  
糞土の壁方一砂の結構  
本陣の常ハツんとまろくふ  
糾とろくふ音れそらより  
辨當多持せぬ地王は花はり  
羽織は肩よるめくうり

孤英  
好山  
華裡雨  
全  
存義  
杏里  
華裡雨  
存義

あつ自然の針針のついで  
味香月外余部合まらぬ  
遠くはたのついで  
ハ一は殿のついで  
用はたのついで  
やどりのついで  
御はたのついで  
群はたのついで

存義  
存義  
存義  
存義  
存義  
存義  
存義  
存義

裁りり暇おしれの許の田の

重義

井筒より倚りて影成見お月

存義

やけむりく簾の跡と唐紙

爲茶

やう物鳴る淋しうゑ猫

可因

やう殿を馬追よ出た二日あけ

存義

てんてんてん嘘と新すけらん

爲茶

初雪は夜食時分り降りて来て

可因

自然と稜の丸足踏む石

存義

こころもあはれと了河小寺の松木

爲茶

古跡をうのりひんの順禮

存義

あつと餅屋の噂の愛相も

重義

守宮であはれ臭い黒焼

可因

遠山の近況も雨の降ふとて

存義

兒と相キり根分す依菊

爲茶

閑居へと上下客のたれの時

可因

土圭と合寸遅いりくも

重義

御坐船より月日の四半翻り

爲茶

露拂ひも初中後の酒

存義

顔に似ぬ今度の光見心り

重義

頭中かぶりて木兔のほろり

可因

薬屋の朝日静かにふりかへる

存義

せり鉢坊の支離るる

爲茶

油断して雪駄さしる法乃場

可因

不きく白田の垣下垣 結ぶ

重義

降りしつと無下るれ郭公

爲茶

目白岱のしるむ日の番

存義

所懸負小内儀の手際さりとて

重義

味噌の蓋小き見てしとよ文

可因

煤とりて月せみの離れ藏

存義

歳の中うし柳芽を張は

爲茶

明くき紙飲友達と唯ゆる

可因

程子も朱子と氣よみぬ

重義

山川を岩小せりきて波をきり

爲茶

鷺一ねと花いちり

存義

弓杖もやもぬた衣腕うけ

重義

舎人のしほも春めけり

可因



得し裁るまのしや秋は朧枕  
 誰の應ゆ月のおとより戸  
 小男鹿の狩場と朧のる来  
 南より西より吹ゆらんたり  
 朝汐小船上の管絃荷りらん  
 ちのちらん人の尻を笑ふ綻ひ  
 強力のやう小鳥阪を登らぬ寸  
 早百合小わくま咲の山吹  
 ふしとせ小後の四月のやうもみ

芝六  
 存義  
 龜文  
 恭里  
 葵足  
 執筆  
 存義  
 芝六  
 恭里

(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)

見居て見待と恋  
 酌しり小長柄習ハ寸女のつしハ  
 光る燭臺  
 更し月のひかり  
 松檜  
 醍醐の山下  
 秋風  
 明暮をぬのし給と定めぬ  
 中し新すすしの御亭主  
 二三年のつきと花のうらも  
 庫裡あけて出來る春の入佛  
 亀文  
 芝六  
 葵足  
 存義  
 龜文  
 葵足  
 存義  
 葵足  
 存義  
 葵足  
 存義

何處見ても京無き女のうらみ  
 うきと思す旅のせつしり  
 一目の負暮をけくは夜と共  
 本尊は顔へ朝日てり  
 さつふりと鴨の下りる水は音  
 酒買をり也城の侍  
 友もとる今とさうりのちり風  
 状のうくて違ふ照降  
 やすくとも石と船廻し  
 葵里  
 龜文  
 葵六  
 葵足  
 存義  
 葵足  
 存義  
 葵足  
 存義  
 葵足  
 存義

半分岨小のあつ神樂所 芝六  
 月見もたん夏も扇をソ寸れり 泰里  
 何ともの器用小丁らの太郎冠者 亀文  
 算の竹も青にうしらなり 芝六  
 日あつりもうら長谷の麓町 葵足  
 総寄て書付よりけり 存義  
 遺つるいりぬ御代を花を 葵足  
 そつと静小今あつ 春 泰里

全神の入り...  
 遺つるいりぬ御代を花を...  
 そつと静小今あつ...  
 泰里...

猪は出さるゆゑ迹や秋の月

礎の寸さるる里の遙く

酔醺漉小下モの者とも元氣得て

草履挟む細工ありたり

ちりりこりこり別屋の建し系櫻

蜂と違ふて怖ふる蛇

道端小御影供参りての休と居て

手拭とて此に餘扇のつくさる

塗桶の大口明て小くこり

西來

新柳

中車

存義

又少

中車

新柳

西來

存義

間より二階のこりこりと鳴ふ

僧達こりこりこりこり江湖過

霜も此より胡蘿蔔の色

溝川小つらせぬ橋の石のこり

埴生の中に金持れ家

挾む箱明て御礼も益れ入

霞より残れ月待れ月

遠山の雪も麓も花のこり

村より泊て居る雛より

又少

中車

新柳

西來

存義

新柳

中車

又少

西來

あつたしき後家と世間を何の  
 火くやう小見ぬ玉むし  
 松蔭よりして置し海より  
 ふんと撞出す晝飯のこ  
 つつと御預人のつとまきて  
 歌のさへ河の聞とまの  
 鷗さくねぬ時分の和歌の浦  
 暑の續ていり真砂地  
 門並の杉の病いよくと明の

存義  
 新柳  
 中車  
 夕少  
 西來  
 存義  
 中車  
 夕少  
 西來

あんを鳴して寸の嬰兒  
 夜の長い峠は月をうんと早して  
 崩れ次冨の築の 滋點  
 神のの城衆と秋の西あり  
 坂乃使の最ふりふ 筈  
 あん時を返魂丹とありりり  
 花をむしよ漕渡し丹  
 杖を曳牛の御舟も遅延下  
 くれ立庄砂の軒のつくくら

西來  
 新柳  
 夕少  
 中車  
 新柳  
 夕少  
 西來  
 執筆

黒木積む下小花も野菊くれ

存義

た〜ありむ〜の窓も機織

如英

月小来んよ〜あゝ友伴ひて

可因

今止む雨のよ上りなり

存義

羽〜た〜し〜ま〜くの雞の聲

如英

寒の繰と〜早〜ち搦

可因

と小〜い〜り〜か〜る〜地主殿

存義

稲廿何の屋根〜り〜寸干物

如英

藤棚と夏〜ら〜や〜た〜ら〜

可因

登り下りの鼻を目志ほし

存義

のり戀ハ温飢喰ふ箸なるもやは

如英

はは張つてくくハ行燈

可因

柏子木の音を吹らるる夜あり

存義

滋のくさり改配を陣

如英

半玉ハ連歌法師ハ氣の所なき

可因

上うくくハ先月と啼く

存義

棄木の藪陰ハ木下くハ咲

如英

り河まきをして父郎甚閑あり

可因

水飴小中着錢と移くもきて

存義

楊子場ハ鼠るも出寸

如英

觸事の帳ハひりりと

可因

ゆいゆいハ人々を捜す秋

存義

ちくちくハ生田の杜を堅之横耳

如英

又ちちちと降僻のけく

可因

むつしき縁の媒仕わりて

存義

袴まきの神祈ハ戀

如英

馬駕籠ハ江戸の廣サのつこも

可因

ねどして有と金下高札

存義

月見小舟のつるぬ鹿の武左衛門

如英

お公家様と秋を悲しむ

可因

掃庭小せんしやもろ柳散家

存義

りの橋渡つり経堂

如英

セツの珠敷と味ハハぬま

可因

遠慮會親も長く酒

存義

手折る氣はひま夜の花

如英

木心つ蛙の出来し山の井

可因



存義

徒疏

恭卿

淨阿

連馬

恭卿

ふりまき物うゝて咲星はれし

かつしほのほろ小閏年

國人は大荷をたらす納して

八重蛇の蚊を飲んく小半の酒

二三日降ともほすあつめり

十里をらりもあつ人遠山

晝よりふ伸つ縮むの舟 動く

徒琉

膳所衆をきき 町の振廻

存義

八畳より高麗縁より 静あり

淨阿

日づれ一日をきき 琴を弾く

連馬

旅人と交す馬を見し出らむ

恭卿

形見のつらさなり 娘逃む

徒琉

ふん風の来りし團扇の紋より

存義

祇園祭に月を 行燈

恭卿

氣の毒を眠りし指し 水中問

徒琉

前後もきき 寸晷誦て居

存義

重箱に犬の來りし 花の陰

連馬

芝の杉葉より 葦寸くまき

淨阿

懺法小屏風より 東福寺

恭卿

逗留中小茶を 砂を拵

連馬

傾城の歌より 家老殿

存義

匂ひちりり 屋根の帷子

徒琉

葉柳の稲何小あり外へも

淨阿

團子ハさう小賣物志ま

恭卿

男とも鉄を切りに野らり

連馬

瘡の行ちして十日はば

存義

ようてゝゝ柘榴小鉢をよりの置

恭卿

手紙をもつて萩菜の

淨阿

板塀のくさくさ月影

徒琉

何處くされ來てきり

連馬

うまひ子は鹽水より

存義

ちと用あつて有常留守

淨阿

枝川の横を小川の橋の

連馬

瓦燈は干つて並へり

徒琉

餘處で喰ふ牛飯も此花の空

淨阿

身小持のむ程の長き日

執筆

萩原之卧猪の牙と三日は月  
小鷹狩してくく宮人  
天秤の音高くと秋風  
うら敷揚てく灰とそつり  
腕押の拾ひと取て涼く居る  
路の木根と榎ありり

存義  
理同  
桃子  
波江  
可因  
執筆

竹條とけく雨もつりし夜の明て

理同

右身赤坂のこす 熊坂

存義

縁起さくうて舊ぬ寺あま

波江

たたこの莖を纏ふ飼犬

桃子

桃賣ハたもひ出されぬ見知じ

存義

くま 楊枝のほち糸女郎

可因

入る文れゆぬあ新ハ吹ちし

桃子

白田の中れ井を垣とせす

理同

花守ハ爺々婆々として見ふれ

波江

草のもしらぬと歌まらて

存義

暈のしてあをゆくる宵を月

可因

川手とゆして鷺の一二と

桃子

氣の翦ぬやうに二階小うけし物

理同

浪人剛新母のこころは

可因

正月の來るとりよの小きひ雪

存義

鼻よあして岸の捨舟

波江

順禮の誰と呼や小手招ま

桃子

女子て思やりの奈良茶屋

理因

針箱を片尻うめて榎に隅

可因

庚申の夜は些多雨風

桃子

紫と秋葵は花をばらりあり

波江

角りをやりの村の丈高

存義

盡寐の寐つゝあはして朝の月

理同

盥ひててたまし泥沓

可因

目小しくは神と在りて筑波山

存義

連歌のくは路のありし

理同

此丁の冬つゝ屋のうらや

桃子

暖簾をうらやと暮行

波江

参宮もこの世のそれか門は注連

可因

梅は御札を結ふて細む

五明

間ありてやありて蘭の薫り哉

返歌待を月夜の御使

追廻寸籠ぬも山雀窓紙出

曇るや夜のあくるあり

一二艘岸よ横くつりし舟

笠より寸死して房は半道

存義

桃里

朝四

葵足

桃里

朝四

何ふとも美まきぬほつゝ者

葵足

巨燧の中は薬籠ふり

存義

雪風の障子ふあゝれ音たふり

朝四

ちやくとくくゝ殿のちよ

栴里

鞍馬もちつと貴船の戻り

存義

日のめとてぬ杉の下道

葵足

あゝ鶯の飛んと旗のひらり

栴里

子政待母の門の夕く

朝四

何處とてとこまの贈小節は膳

葵足

雨と願ひ乃花の春あ

存義

田の畔の二節三節ねる月

朝四

狐てあはれと飛脚氣のつく

栴里

馬の背小遠くとも来ぬ若杖鯛

存義

施薬ハ神の甚ク想あり

葵足

此町て二と下るぬ腹ふく

栴里

うき世くとるれ寸葺禮

朝四



はらゝいひのきく北風東風

葵足

くさやうとふやう音は碓

存義

筆まゝのふ女文字子して旅日記

朝四

燈うらけりて日和のうらけり

桃里

御館ハサ一の震とこらしく

存義

樹下鳥のあは池の中島

葵足

夕月又音はとくまゝ雲の出

桃里

うそ寒もあはれ宿川の袖

存義

此中の野分り垣とうち倒れ

朝四

鳥乃あふえあはれ卵塔

葵足

暮小精とけりてそと見て歩

存義

屏風の角了客の鍵さ

桃里

長閑はの世間と花のこらあ

葵足

百さくつりの舟とあ

朝四

川萱もいしりまへる花野の  
本草志りのまへる露  
懇も月たあゝの料理して  
重なるの形は屏風仰向く  
雨漏のうしろ置るのそと  
山越す飛脚聲のつらり

存義  
武陵  
常仙  
存義  
武陵  
常仙

川萱もいしりまへる花野の  
本草志りのまへる露  
懇も月たあゝの料理して  
重なるの形は屏風仰向く  
雨漏のうしろ置るのそと  
山越す飛脚聲のつらり

鉢巻小拵んと柳をよみ

存義

袋の明くぬき口

武陵

重代をまじりの時は太力カ

常仙

松建し夜小雪のころさけり

存義

此ころハ錠にらしし豆腐の味

武陵

神祇組しやそ弓矢ハ幡

常仙

そり此小うのまこ足を踏く家

存義

隈を此月夜も戀の闇

武陵

猫の翠簾小面出寸秋の風

常仙

鞠し柳の散切りりり

存義

花立の師匠も杖小威とつげ

全

寶貝更びき小らつて來せり

常仙

方角の違めく見ゆれ惠吉棚

武陵

らりり町を麓ありり

全

鳥さしの後小立て南無阿弥陀

常仙

願ひ祈りて腹の子じり

存義

腰張のりくの透とをり

武陵

京使と月下二三度

常仙

きりりの甥と田南部の跡と

存義

知とまらぬ田時雨降

武陵

朱鷺の羽の赤ふなり又白ふあり

全

射前の産のひくと筋違ふ

存義

暮の月くんとくまてゆくの

常仙

火とりの火とく消て稍寒

武陵

くしりと駕籠と音すく樹と露

存義

七湯破見小歩行く足病

常仙

短冊と持まゝ人の持て居

武陵

三奴小ちとる風鈴

存義

本郷の櫻の馬場小花曇

茂陵

いさくの目とつ春芸管笠

執筆

朝うらや晝もと露わくく 水驛

菜山

冬蛭子遊ふつゝ小舎人

升成

丸くと出らゆし月小頭を撫て

存義

かきゆて有る椀の崩ゆ

可因

うし紙とあらしこらし建違

時雨丸

とまり鳥は五羽と七羽を

白抄

虫の毒しやうくくく肩車

升成

内儀の御意小入の権助

菜山

庚申の丈長五枚酒 二升

可因

沖の方へ今降る来り

時雨丸

病人を伸豆の熱海の見晴し

白抄

能あふ鷹のつく寸琴丸

存義

折形とさうのあきや慰ま也

時雨丸

まじ上京へ春来小り

升成

去年の小るの寸まきと味也

菜山

草鞋を花に見ても見んを

時雨丸

雲切の藪の棒は月の照

升成

家こもるの跡のうそ寒

菜山

他人少も憐れは魂祭

存義

むりしの兄弟の母

白抄

松風の吹すすくく又すく

時雨丸

舟のあきりと千鳥鳴あり

可因

連歌せぬ男ハそつと寐又立て

白抄

妹ハあつと細みでたつ

存義

錦木と移り行世とありかたり

萊山

埋りて苔乃碑

升成

水結子浪人ノ体ノまくりぢハ

可因

泣寐入る依兒ノ月影

白抄

とつと神田及奈此雪乃雨

存義

あつに残りし重箱の杓

可因

芝原の奇麗はへんち方ハ

白抄

さつととあつに智恩院様

存義

針とて小月代刺してやうと

升成

五つまくわし舟ハ來て居る

萊山

鶴ひつとあれつと通る花の雲

可因

障子ちつとしてあつと暖の

時雨丸

ゆり 小隱の家にせん草の花

李子井

杖小隠のくさりのけうふ

存義

三日月のひつゝあゝと暮る

葵足

洗濯との改椽のゝゝ溜

李子井

舟のくも容の見えゝゝ夏坐鋪

存義

舟の留主して欠ひゝゝ

葵足



又雨のち降りりと降出して

李子井

戸板二枚より縮破肉桂

存義

百姓と都近はりこしやうなり

葵足

歌一首ふてあまこまひひ

李井

空ても繪馬と首とありのま

存義

逆はり又池へうはり回廊

葵足

木り、千寸俄上りて鷓の聲

李井

晚、月見し之駄賃うつらや

存義

雨の手と提て鯉と小こり酒

葵足

ま、唐紙、張らぬ新宅

李井

し、の、い、し、あ、り、の、山、の、花、下、風

存義

松木なるのわき春は川水

葵足

御院主の旅、出やれ、年始や

全

朝は六つ、の、廊、又、伴頭

存義

茶、の、の、側、又、細、引、一、く、り

李井

車に牛はちりてまて居る

葵足

く川蟬は日此園過て栗田口

存義

何成り少と連の不風雅

李井

糧飯と修行の爲小喰て見て

葵足

金の來るや濱の松風

存義

門く小迎火をばる月のうき

李井

雨のあつた冷り

葵足

別去路の衣紋直せし雁あはて

存義

雨のあつた冷り

李井

金屏の壁の崩れ城うち隠し

李井

川の流りて寺成本陣

存義

そくの中喰ちしし犬の五器

全

子成抱とて尿と教ぬ

李井

日むきく花爛熳の神や流

葵足

芝生奇麗よそ五形草

全

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, appearing as ghostly characters and lines across the right half of the document.

援本齋書

